

学生は「学問への扉」をどう受け止めているか ― 学生アンケート調査の結果について―

佐藤 慶太 (大学教育基盤センター教授)
野村 美加 (大学教育基盤センター調査研究部長)

1. はじめに

「学問への扉」は、「新入生の多様な興味関心に答えながら、高校とは異なる大学の学びの面白さ＝驚嘆や喜びを体感させ、学生の知的関心を広げる」(香川大学、2023、11頁)というコンセプトのもとで2022年度より開設された科目群である。「学問への扉」は「読むことのすすめ」、「研究のみかた」、「学びへのいざない」という三つの下位科目群を有する構造になっており、それぞれ「読み物が持つ世界の広がりや深さの経験を通じて知的に読む習慣を身につける」、「具体的な研究探究活動の実際に触れ、学問の面白さを感じる」、「多様な学問的視点やアプローチの仕方を学び、幅広く学ぶことの面白さを実感する」という目的を持っている。

表1に示す通り延べ数で2022年度928人、2023年度では892人が「学問への扉」を履修しており、1回生のうち約7割にあたる人数を受け入れている。新設の科目群としてはよいスタートを切れたと言えるだろう。

表1 2022年度(令和4年度)、2023年度(令和5年度)の履修者数(*数値なしは不開講)

	講義題目	期間	2022年度 履修者数	2023年度 履修者数
読むことのすすめ	メディアとなるもの	1Q	45	17
	本との出会いで広がる世界	2Q	94	76
研究のみかた	教育の“これまで”と“これから”を考える	1Q	78	41
	やってみる科学	2Q	63	35
学びへのいざない	越境する学問 イ	1Q	71	106
	越境する学問 ロ	1Q	37	62
	デザインのすすめ	1Q	114	81
	自然科学へのいざない	1Q	79	79
	近代と科学	1Q	25	-
	大学的香川ガイド イ	1Q	88	76
	世界の言語と文化	2Q	88	147
	大学的香川ガイド ロ	2Q	107	133
	SDGs学入門	3Q	32	24
	国境を超える看護学～ユニバーサルヘルスカバレッジ	3Q	7	-
	国境を越えて健康を考える	3Q	-	8
	アントレプレナーシップ(入門編)	3Q	-	7
	合計		928	892

昨年度、この科目群の担当教員による実施状況の報告をまとめたが（佐藤他、2023）、学生がこの授業群をどのように履修し、どう受け取ったのかについて分析を行うことはできなかった。履修動向の分析については本号の西本論文（西本、2024）を参照されたい。本稿では、2022年度1Q～3Q、2023年度1Q～2Qに、「学問への扉」の受講者を対象に実施したアンケート調査の結果をまとめ、学生が「学問への扉」の授業内容をどう受け取ったのか、特に定量的な観点から分析する。

2. アンケート調査の方法

「学問への扉」に属する授業（2022年度は1Q～3Q、14科目、2023年度は1Q～2Q、11科目）の受講者を対象に、Moodle（香川大学で使用されているLMS）のアンケート機能を用いて調査を行った。各授業のMoodleコースに同一のアンケートを設定し、授業開始時、授業終了時の二回、質問に答えてもらう形をとった（それぞれの質問は別のもの）。調査期間は、授業によって多少の違いがあるが、原則として初回授業より2週間、最終回の授業より2週間とした。回答率は2022年度の授業開始時78.7% 授業終了時53.9%、2023年度の授業開始時94.9% 授業終了時63.0%であった（履修者数は2022年度（1Q～3Q）928名、2023年度（1Q～2Q）840名）。アンケートの質問項目は、以下の通りである。

A. 授業開始時のアンケート

1. 高校時代は文系でしたか。理系でしたか。
2. 文系学生は理系科目、理系学生は文系科目に興味がありますか。（「興味が無い」から「興味がある」までを1～4で選ぶ四件法）
3. この授業を受講した動機は、次の点にどれくらい当てはまりますか。（以下の項目について「あてはまる」から「あてはまらない」までを1～4で選ぶ四件法）
選択肢：時間が空いていたから／他になかったから／易しそうだったから／自分の興味や関心に近いから／これまでの興味や関心から遠いから／大学では興味や関心を広げたいから／大学では興味や関心を深めたいから／大学の学問の研究の現場を知りたいから
4. 以下に今年度開講した12個の「学問の扉」講義題目を示しています。第1Q、第2Q、第3Q合わせて何コマ履修予定ですか。（科目一覧は省略する。表1を参照。）
5. この授業に期待することを自由に書いてください。（自由記述）

B. 授業終了時のアンケート

1. 文系学生は理系科目、理系学生は文系科目に興味をもちましたか。（「あてはまる」から「あてはまらない」までを1～4で選ぶ四件法）
2. 文系（理系）学生に理系（文系）の魅力伝えてくれましたか。（「あてはまる」から「あ

てはまらない」までを1～4で選ぶ四件法)

3. この授業を受講した感想は、次の点にどれくらい当てはまりますか。(以下の項目について「あてはまる」から「あてはまらない」まで四段階で選択)
易しかった／自分の興味や関心に近かった／自分の興味や関心を更に深めることができた／まわりの世界と結びつけて学ぶ意義をより深くつかむことができた／新たな興味や関心を持つことができた／学問の研究の現場を知ることができた／書籍、新聞、ウェブサイト等、いろいろなメディアの面白さや重要性に気づくことができた
4. この授業を履修した感想をお聞かせください。(自由記述)

3. アンケート調査の結果と分析

3-1. アンケートの分析方法

以下では、アンケートの結果を「学問への扉」の三つの下位区分ごとに平均値を出し、分析を行う。質問項目のうち定量的な分析が可能なもののみを取り扱っている。筆者が見た限り自由記述はおおむね好意的なものであるが、別途分析の必要がある。

「興味が無い」から「興味がある」まで、あるいは「あてはまる」から「あてはまらない」までを1～4で選ぶ四件法の回答のまとめにおいては、平均値をとりパーセンテージに変換している。この際、最大値4を100%と見なし、パーセンテージの数値を出している。

3-2. 高校生の段階での文系・理系の割合、これまで学んでいなかった系への関心

まず、授業開始時アンケートの問1、問2の回答にもとづき、受講生が高校時代、文系・理系のどちらを選択していたか、また、自分が選択していなかった系への関心がどの程度あるかを見てみよう。

表2 授業開始時アンケート、問1、問2の回答まとめ(値は%)

		文系	理系	非選択の系への関心
読むこと	2022	53.5	46.5	68.09
	2023	52.5	47.5	66.5
	平均	53.0	47.0	67.3
研究	2022	40.0	60.0	74.2
	2023	34.0	66.0	79.5
	平均	37.0	63.0	76.9
学び	2022	43.0	55.7	73.8
	2023	38.1	61.9	75.8
	平均	40.6	58.8	74.8
全体	2022	44.2	54.9	73.0
	2023	40.0	60.0	74.8
	平均	42.1	57.5	73.9

以下、便宜的に、高校時代に文系を選択していた学生を「文系学生」、理系を選択していた学生を「理系学生」と呼ぶ。表2より「読むことのすすめ」では、文系学生が多く、「研

究のみかた」、「学びへのいざない」では理系学生が多いことがわかる。本学の入学者全体（昼間主のみ）でみると、教育・法・経済で45%、医・創造工・農で55%となる。単純にこれを文系学生、理系学生に割り振ることはできないが、全体としては理系学生が多いという理解の下で、表2を見る必要がある。

以上を踏まえたうえでまず注目すべきは、「読むことのすすめ」において文系学生が多い（平均50.3%）ということである。また「研究のみかた」、「学びへのいざない」では、全体としてみるとやや理系学生が多いようにみえるだけだが、個別の授業科目の割合を見ると偏りが確認できる。表には示していないが、たとえば2023年度開講の「やってみる科学」では、文系学生が29%、「自然科学へのいざない」では文系学生が14%となっている。表2が示すように、文系学生は理系分野に対して、また理系学生は文系分野に対して一定の興味をもっているのだが、実際に科目選択に至るまでにはなっていないようである。多くの学生において〈関心がある〉が直ちに〈リストアップされた別の系の科目を選択する〉にはならない、ということが推測される。

3-3. 受講の動機

続いて、授業開始時アンケートの問3の回答をもとに、受講の動機を見てみよう。

表3 授業開始時アンケート、問3の回答まとめ（値は%）

		時間が 空いていた	他に なかった	易しそう	興味や関 心に近い	興味や関心 から遠い	興味や関心 を広げたい	興味や関心 を深めたい	研究の現場 を知りたい
読むこと	2022	72.2	50.3	54.8	77.4	43.7	77.0	77.9	58.0
	2023	74.3	51.8	63.9	77.6	47.9	77.2	78.2	57.5
	平均	73.3	51.1	59.4	77.5	45.8	77.1	78.1	57.7
研究	2022	73.1	56.9	55.0	79.9	44.6	76.3	79.7	69.4
	2023	72.4	57.9	63.4	80.4	46.5	81.1	84.2	67.4
	平均	72.7	57.4	59.2	80.1	45.6	78.7	81.9	68.4
学び	2022	74.7	55.2	55.8	77.0	46.6	79.6	79.3	63.7
	2023	70.1	52.8	59.5	78.5	46.3	80.0	80.5	64.6
	平均	72.4	54.0	57.7	77.7	46.5	79.8	79.9	64.2
全体	2022	74.1	54.7	55.5	77.5	45.8	78.7	79.1	63.7
	2023	71.3	53.6	61.0	78.7	46.7	79.7	80.7	63.8
	平均	72.7	54.1	58.3	78.1	46.2	79.2	79.9	63.8

表3より、科目選択の動機のうち、全体で上位を占めるのは「大学では興味や関心を深めたいから」（79.9%）、「大学では興味や関心を広げたいから」（79.2%）、「自分の興味や関心に近いから」（78.1%）である。「易しそう」、「他になかった」という値は低く、学生が安易な選択をしているわけではないことが分かる。当然と言えば当然だが、「関心や興味から遠い」科目をあえて選ぶ学生は少ないので（46.2%）、科目を開設するにあたっては、学生が現在持っている興味関心に応じた内容を盛り込んでいく努力が必要と言える。

問2の結果に関連して述べたが、問3からも学生の「関心」には強弱があること、質問

によって念頭に置かれている強度が異なることが推測される。問3における「興味、関心」は、科目選択の動機となるような強いものであり、問2で扱われた文系学生は理系分野に対する、また理系学生は文系分野に対する関心とはおそらく強度が違う。すると「学問への扉」の目的である「学生の知的関心の拡張」を試みるにあたって、〈強い関心があるものを含む授業の受講→これまで強い関心がなかった分野への関心が強くなる〉というパターンが学生にとって受け入れやすいと言えるのではないだろうか。

3-4. 一人当たりの「学問への扉」の履修予定科目数

続いて、授業開始時アンケート問4に基づいて、一人当たりの「学問への扉」の履修予定科目数を見てみたい。2022年度では全体の平均が2.2科目、2023年度は2.1科目となっている。この予定についての回答は実際の状況と正確に対応しているわけではない。別に集計したところ、2023年度における「学問への扉」の履修者の実数は660名、延べ数は892名である。アンケート結果に出ている科目数平均と履修者実数の積をとると1386となるので、アンケート結果と実際の履修活動とは乖離があることがわかる。

この乖離の理由はどこにあるのかは別途検討が必要であるが、ともかく学問への扉を履修している学生は660名で、1年次生の総数の55%である、という点はおさえておく必要がある。今後履修者数が増えないまま複数科目選択の数が増えていくと、「学問への扉」によって広い関心を持つ学生とそうはでない学生との差（いわば、知的関心における広がり格差）が大きくなってしまうことも考えられる。一方、履修者数が増え、現在と同様の複数科目選択があるとすると、今度は受け入れ体制の強化が必要になってくるだろう。今後「学問への扉」の履修者増を目指すとするならば、実際の履修者数の推移を追い続けるとともに、履修の促しと受け入れ体制の強化とのバランスを考えつつ進める必要がある。

3-5. 授業後アンケートの結果

本節では、授業後アンケートの結果を取り上げる。表4より、問1「文系学生は理系科目、理系学生は文系科目に興味をもちましたか」、問2「文系（理系）学生に理系（文系）の魅力を伝えてくれましたか」という設問において、「学びへのいざない」における値が比較的高いことが分かる（77.7%、74.5%）。「学びへのいざない」は「多様な学問的視点やアプローチの仕方を学び、幅広く学ぶことの面白さを実感する」ことを目的として開設されている。上記の結果から、「学びへのいざない」が一定の成果を収めたことが確認できる。

ところで、「学びへのいざない」に属する科目は、必ずしも文理横断型ではなく、文系間、理系間の横断を特徴とするものもある。今回のアンケートでは、文理以外の横断型がどのように受け取られたかが不明なので、この点を改めて調査する必要があるだろう。

表4 授業終了時アンケートの回答まとめ（値は%）

		文系理系に興味を持った	文系(理系)に魅力を伝えた	易しかった	自分の興味や関心に近かった	興味や関心を深めた	まわりの世界と結びつけて学ぶ意義をより深くつかんだ	新たな興味や関心を持った	学問の研究の現場を知った	色々なメディアの面白さや重要性に気づいた
読むこと	2022	70.3	62.9	76.6	73.2	79.1	78.2	80.8	70.0	79.3
	2023	74.3	68.6	69.9	76.2	81.4	76.2	75.7	66.9	83.1
	平均	72.3	65.7	73.2	74.7	80.3	77.2	78.3	68.4	81.2
研究	2022	75.4	73.3	75.9	79.6	83.7	83.1	84.1	78.8	72.7
	2023	70.2	70.1	78.3	80.2	82.2	83.9	83.2	79.7	70.7
	平均	72.8	71.7	77.1	79.9	82.9	83.5	83.7	79.2	71.7
学び	2022	76.5	74.6	71.2	78.0	82.9	82.3	82.6	77.5	72.1
	2023	78.8	75.1	72.2	79.8	81.3	82.6	84.3	80.4	75.3
	平均	77.7	74.9	71.7	78.9	82.1	82.5	83.4	79.0	73.7
全体	2022	75.4	72.6	72.7	77.5	82.4	81.8	82.5	76.6	73.3
	2023	76.4	73.0	72.9	79.2	81.5	81.7	82.5	77.8	75.9
	平均	75.9	72.8	72.8	78.4	82.0	81.7	82.5	77.2	74.6

関心の深化、拡大に関する項目において、どれも80%以上の高い値が出ている。「自分の興味や関心を更に深めることができた」(82.1%)、「まわりの世界と結びつけて学ぶ意義をより深くつかむことができた」(81.5%)、「新たな興味や関心を持つことができた」(82.5%)。「新入生の多様な興味関心に答えながら、高校とは異なる大学の学びの面白さ＝驚嘆や喜びを体感させ、学生の知的関心を広げる」をコンセプトとしている「学問への扉」が、狙い通りの効果を与えられた証左と言えるだろう。これに対して「自分の関心に近かった」という項目は、78.3%で、比較的低い。しかし、関心の深化、拡大に関する項目の値と関連付けてみるならば、必ずしもこの結果を悲観的に捉える必要はないように思われる。3-3において述べたように、学生の知的関心を拡張していくにあたって、〈強い関心があるものを含む授業の受講→これまで強い関心がなかった分野への関心が強くなる〉というパターンが学生にとって受け入れやすいと考えられる。だとすればアンケートの結果は〈内容は自分の関心には近くなかったが、授業を経てそれ以外のところに関心が広がった〉という事態を反映していると考えられるだろう。

「学問の研究の現場を知ることができた」、「書籍、新聞、ウェブサイト等、いろいろなメディアの面白さや重要性に気づくことができた」という項目は、「研究のみかた」、「読むことのすすめ」の効果測定のために設定されたものである。「学問の研究の現場を知ること」では「研究のみかた」の科目群で79%という値が、「メディアの面白さ、重要性」では、「読むことのすすめ」の科目群で81.2%という値が出ており、コンセプト通りの効果が出ているといえる。

ちなみに、現在大学教育基盤センターでは「学問への扉」のリーディングリストを作成している。この取組を授業の中で活かすことで、「学問への扉」全体で、研究におけるメディアの重要性を、より意識させることが期待される。

4. おわりに

以上、2022年度、2023年度において「学問への扉」で実施されたアンケート調査の結果をまとめ、分析を加えた。調査結果より、「新入生の多様な興味関心に答えながら、高校とは異なる大学の学びの面白さ＝驚嘆や喜びを体感させ、学生の知的関心を広げる」という「学問への扉」の狙いは、十分に達成されていると言えるだろう。

ただし、本稿で述べたように、学生が「関心を持っている」という自己判定をする場合でも、関心の程度には強弱があり、関心を持つことが、その分野の学びを積極的に進めていくことに直結するわけではない、ということには注意が必要である。それゆえ、今回の調査結果で「広がった」といわれている関心が、次なる学びにつながるほど強いかにについてはさらなる検証が必要である。この点は、「学問への扉」の履修者が後期以降でどのような履修選択をしているのか、追跡調査を行うことで見えてくるかもしれない。

また「学生の知的関心を広げる」という場合、この目的を持つ授業をかならず文理融合にする必要はない、という点にも留意しておきたい。理系分野、文系分野自体も広大な領域である。例えば「自然科学のいざない」のように理系における多分野を幅広く学ぶ科目も、知的関心をひろげるために有意義である。文系学生がまず文理横断型の科目を履修し、理系分野に関心を持ち、第二段階で「自然科学のいざない」を履修し、理系分野に関して幅広い関心を持つようになる、というルートも考えられるだろう。一つの科目がすべての役割を担うわけではないので、「学問への扉」全体で、どのような関心の拡張がありうるか、俯瞰的に見ていく必要があると思われる。今回、「文系学生」、「理系学生」を軸にしたクロス集計を行うことはしなかったが、これを行って、それぞれが「学問への扉」の理系科目、文系科目を履修してどのように関心を広げたり、深めたりしているのかを分析することも有意義であると思われる。この点は今後の課題である。

最後に、「学問への扉」の取組は全学共通科目、延いては学部教育全体にも関わってくるものであることを確認しておきたい。「学問への扉」でどれほど関心を広げても、学士課程教育において継続的に、幅広い学びの可能性、およびその意義を確認する機会がなければ、それこそ竜頭蛇尾というものである。少し話が大きくなったが、せっかくはじまった「学生の知的関心を広げる」試みを香川大学全体で推進していけることを願いつつ、擱筆したい。

付記

「学問への扉」の履修者数の調査では修学支援課の協力をいただきました。この場を借りて御礼申し上げます。

参考文献

香川大学（2023）『全学共通科目 教員ハンドブック 2023年度版』香川大学大学教育基盤

センター。

西本佳代 (2024)「全学共通教育新カリキュラムの受講動向」香川大学大学教育基盤センター編『香川大学教育研究』第 21 号、3-14 頁。

佐藤慶太・小坂有資・蝶慎一・寺尾徹・岡田涼・井藤隆志・田中直孝・守田逸人 (2023)「「学問への扉」の新規開講を迎えて」香川大学大学教育基盤センター編『香川大学教育研究』第 20 号、33-49 頁。